
少年魔術師 - A spell Illness -

紅 もみじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年魔術師 - A spell illness -

【Nコード】

N4459V

【作者名】

紅 もみじ

【あらすじ】

魔術と魔法が存在するこの世界。この二つは似て非なるものとして扱われていた。全ての人々が使い、利用する魔法と違い、特定の者のみが扱える魔術。ある特定の条件を満たした者にのみ与えられるその能力に、国は利用価値を見出し資格を与えた。『魔術師』この称号だけで軍の幹部と同じ程度の権力を有する。

最年少で『魔術師』の資格を授与された少年、イゼ。彼は相棒のアゼと共に、自らの目的を、探す。

*漫画に影響されやすい作者がかいています。大目に見てやってく

だ
さ
い。

第一話 魔術師？

『主がいつまでもベンチで腐ってるからですよ！』

「うるさいな！わかつてるよっ！ってか腐ってるって何だっ」

煉瓦づくりの古めかしい町の駅。等間隔で並んだ行く本もの煉瓦の柱と、木のベンチ。そして“ジキナ”と書かれた木製の看板。太い柱の支える天井は、そのまま屋根でありそのほかには何も無い。都市と都市との中間にあるこの町に、人はまばらだ。もちろん駅にも人はあまり見えない。

「あー　！その列車！待ったああああ！！」

プ

ゴゴ、ゴゴ、ゴト

「行っちまった…」

『夕刻まで待つしかないですね』

「・・・」

腰ほどまである金髪をなびかせ、紺色のコートをだらしなく肩からこぼれさせ、少年は列車の向かった方向を見つめる。同じく金色の瞳を、眉を、顰める。

「ま、あいつに会うのが遅れるのはいいんだけどさ？遅れるとめんどくさいんだよな・・・」

『仕事増やされますからね』

「はつきり言うな」

少年の傍らにいて、背に荷物を乗せた大型の犬がくつくつと笑う。鼻のあたりだけが白く、そのほかは真っ黒に染まっているその犬からは、ただの犬とは思えないまがましい黒い『なにか』がときどきほとばしっている。通行人はそれに見向きもしない。いや、気づかない。

「ああ・・・どおすっかなあ・・・」

「おお？お譲ちゃん、昨日その辺で寝てたこだろ？」

明らかに少年を指した誰とも知れない人物の言葉に、少年はおそるおそる振り向いた。

「・・・俺？」

「そうそう、俺なんて女の子が言うもんじゃないぞ？」

そこには、頭にバンダナを巻いた茶髪の男性が立っていた。服装からして、駅の警備員とかではなさそうだ。けして若くはないその男性は、どうやら少年を少女だと思っているようだった。

「いや、お」それに！あんなところで寝てたら危ないだろー？都会ほどじゃないがこの辺だつて不審者くらいいるんだぞ？」

「不審者……じゃなくて、俺は男です。そんな物好き……いないですよ」

もう慣れてしまった訂正に半分呆れの色を乗せる。後半の言葉に自信が持てなかったのは秘密だ。

「へ？えっ！！ありや、こら失敬。また随分と可愛い顔した男の子だこと」

「ははは。嬉しくないですね」

「だからといってあんなところで寝るのはお勧めしないな。そういえば、列車に乗るのかい？」

「あ、はい。でも逃したんで時刻まで待ちます」

「ほどこ行くんだい？旅のもののようだけど」

「クディアに」

「首都にか。何だいお使いかい？」

完璧に子供扱いをする男性に、少年はむっとしてなげやりに放った。

「仕事の帰りです」

「仕事？その年でかい？」

「おじさん。おれを何歳だと思ってますか？」

「え？14くらい」

とぼけたように答える様に、少年はさらにむっとした。

（確かにちっちゃいし、顔だった童顔だけどー！！）

『落ち着く落ち着く』

「え？違う？」

「俺は17です」

「うわ、さっきから俺君に失礼なことばかりしてるよね？」

「そうですね」

「すまんねー。でも一人で仕事で渡り歩くなんでやっぱり若くないか？」

「そうですね」

『二人ですけどね』

少年の傍らの犬が少年に笑いかける。

（うん）

少年は不自然にならないよう顔を向けずに答えた。声に柔らかさ
を乗せて。

「あー、んじやこーいうのはどうよ？お詫びとして、夕刻まで俺が
この町を案内してやろう！」

第一話 魔術師？（後書き）

初投稿です。

文が残念なのは…する してもらえとうれしいです（＾＾）（…）

第一話 魔術師？

都市と都市とに挟まれて活気と若さを失った街。ジキナ。

他の町へと伝わる風評は、その街に一歩足を踏み入れた途端に紙くずになり果てた。田舎ではあるが、それ故に緑も多く、果実などが豊富に実った木々が連なる果樹園が多くみられる。ぼつぼつとみられる若者の姿から、若さを失ったというのは既に通用しないことだろうかえた。

煉瓦造りの小さな家々の中には看板を掲げている物もある。男性スダロに言って中に入ってみると、果実を使ったジュースやワイン、菓子類などが売っていた。

「・・・うまそ」

「おお！うまいぞ！買ってつたらどうだ」

「じゃあ、これを一つ」

少年 イゼはほんのりとピンクがかった、丸いお菓子を一袋とって言った。

「いいのを選んだな！そりゃこの辺でとれた桃が入った饅頭だ」

「桃饅頭？」

聞きなれない単語に首をかしげるが、外に出てからかじって見ると、桃の甘みが口の中に広がってとてもおいしかった。

『主、食べたい』

「後で買つといてやるよ」

「ん？なんかいったか？」

「あ、いえ」

口に出してしまったことに慌てて残りを口にほおり込んだ。

そのままあたりを見回す。やはり、うわさに聞いていたものとはだいぶかけ離れている。もちろん、いい方に。あの風評はもう古いのかもしれない。

「どうした？」

「いえ・・・」

「な？意外といい街だろ？あんな風評なんて嘘みたいだろ？」

「はい」

「昔はあの通りだったんだぞ」

「スタロは誇らしげに言った。自分達の成果だと言いたいのだろう。」

「よく、変わりましたね」

「これもな、地主さんのおかげなんだよ」

「地主？」

「ああ。前の地主のやろーは腐っててよ。おれらに税ばつか要求して何もしてくれなかったのさ」

（よくある話だ）

「でもよ、数年前にお役所の見回りが来てな、その地主の愚行を見抜いて追い出してくれたわけよ！」

「スタロはこぶしを握って空を殴りつけた。イゼは黙って聞く。よくある話がそうでなくなった結末のこの町。それがどうやって生まれたのか、仕事上の興味も相まって聞きたかった。」

「そこでやってきたのが今の地主さんなわけだ。おばあさんなんだけどよ、これが話の分かる人で、さっきの果物使った商品とか、その果物の栽培とか、発案したの地主さんだしな」

「そうなんですか」

『すごいね』

（ああ。ぜひともあいつに教えてやりたいものだ）

『あいつがやったんじゃないの？』

（もっと下じゃねえのか？）

『なら知ってるでしょ』

（・・・）

「どうした、そんな顔して」

「苦虫をかみつぶしたような顔で地面をにらむイゼに、スタロは首をかしげて不安そうな顔をする。ご自慢の町の話に気を悪くしたと

でも思っただろうが、もちろんそんなことはない。

「なんでもないです。すごいですね、その地主さん」

「だろ？」

「会ってみたいです」

「それはどうか？今歩いてる道の突当りが地主さんの家だけど、今は・・・」

二人（と一匹）は話ながら歩いてきたため既にあの店からは離れた場所にいます。小さな小道の横には大きな木々だ連なる。

何も考えず、歩みを一歩進めたその時。

キイイーン

「うあつ・・・」

連なる実をたたえた木々。

イゼはその場に崩れ落ちた。

道をまっすぐ行った先にある、レンガ造りの周りから比べたら大きい家。

「どうした！？」

家の中の左端の一室。

「いい！だいじょうぶっ」

布団の中で、あえぐ娘。

イゼは頭を抱えながら片手で延ばされた手を払いのける。

「だが「大丈夫っ。もう、なおった」

自力ですつくと立ち上がるイゼを見て一応安心したように、スダ口はため息をついた。

「・・・そうか」

服についた土を手で払う。その目にはさっきまでとは違う輝きがともっている。

『地主とやらの家ですね』

「ああ、こんなところで仕事かよ」

「あ？」

いきなり口を開いたイゼにスダ口は目を向けた。

「仕事？」

「そ、仕事。っていうわけでおじさん。地主さんに用が来ました。地主さんの家に不治の病にふせっている方はいますか？」

「！なぜ、それを・・・」

「いるんですね？」

「あ、ああ」

「じゃあ案内して下さい」

イゼのその迫力に押され、

「ああ」

スダロは首を縦に振った。

第一話 魔術師？（後書き）

おじさん、観光業者の人みたいです…

イゼ君は甘いものが好きです。

第一話 魔術師？ 終

「こつちだと思っただけだな……」

『さずがは方向音痴ですね』

「うるさいな！ 左つてしか分かんねんだから」

『おや？』

「なんだい！？ 君らは！ 誰に許可を取ってここにいる！」

赤茶色の煉瓦で造られた大きめの洋館。スダロの言う地主さんの家にイゼ達は来ていた。鉄格子の仮門を無断で開けて入って来た彼らは、そのまま洋館の扉を開いた。もちろんスダロは反対したが、彼らが聞くはずもなく。無断侵入した彼らは、案の定、中の使用人に見つかって冒頭に至る。

「誰にも？ 俺らはここで臥せってる娘さんを治しに来たんだ」

「お譲さまを？」

「え、ちよ、そうなの？」

自信満々に言うイゼに、使用人は不信感と驚きとを混ぜ合わせた視線を向けた。イゼの後ろでは何も知らずについてきたスダロが混乱して小さくなっている。

「案内してくれないか？」

「……無断侵入者を信用するわけにはいきません。まずは地主さまに許可を取ってからにしてください」

「信じてない、か……ならこれで、どうだ？」

『見せちゃいますか』

イゼはおもむろに右手を上げると、袖口を下げた。

「あ！ それは……！」

イゼの手首には、三本の銀の輪が巧みに絡まった形の腕輪がぴつたりはまっており、ちょうど手の甲の向きには若草色の宝石が光を放っている。

「『魔術師の称号』……君は、魔術師だったのか」

国家から与えられる『魔術師の称号』。この資格は、国家が厳選した魔術有使用者に与えられる。全国でも数えられる程度しかないといわれているとても貴重な称号だ。その権限は軍の幹部に並ぶ。案内してくれますね？」

「はい・・・」

「呪病、だな」

『そうですね、まだ助かるようで・・・よかったです』

「じゅびよう、ですか？」

使用人の方に案内してもらい、洋館の一番左端の一室にやって来た彼らは、ベッドに横たわる女性を見て目を伏せた。

イゼ達を案内した後地主を呼びに行ったため、使用人はこの場にはいない。

「その名の通り、呪いの病だ。人間には薬は作れない」

『それ以前の問題ですけどね』

「じゃあ、どうやって治すんだよ」

イゼは質問には答えず、ミスからの右腕を左手でぎゅっと握った。

（醜い・・・）

『あれが“魔”というものです、分かっているでしょう』

（ああ、でも、慣れないよ）

「あなた方が『魔術師』ですか」

「地主様！」

声のした方を向くと、温和そうなおばあさんがやつれた表情で立っていた。よほど娘を心配しているのだろう。

「地主さん。御嬢さんは、呪病ですね？」

「ええ・・・治してくださいますか？」

「はい。お任せ下さい。ただ、簡単というわけではありません。その辺、ご了承いただけますね」

地主はこくと頷くと娘のベッドに歩み寄った。

「テシユ、もう少しで楽になるからね」

母が優しい声で呼びかけると、苦しそだった呼吸がわずかに和らいだように見えた。

「でわ、下がってもらえますか」

イゼに従い、その場にいた地主、スダロ、使用人の三人が部屋の端による。

それを目の端で確認して、目を閉じた。

（展開）

途端、何やらよくわからない文字や模様がぐちゃぐちゃに並べられた紋様がベッドを中心に出現した。

「わ・・・」

三人は息をのみ、その光景に目を見張る。早々拝めるものではないのだから、当たり前だ。

（召喚）

イゼはまた心の中で唱えると、きつと目を開いた。その見据える先には、女性の体から追い出された黒のような青のような赤のような、動物の様で人の様な物体。容かたちの定まらない、彼らが“魔”と称する異世界生物がある。

殻を探してもがく“それ”をもう一度睨みつけ、うつすらと口を開く。

「滅」

『ギギやああアああアアあッ』

「っ」

ドッ

白い煙が部屋を舞う。

地主、スダロ、使用人の三人は啞然として動くことも出来ずにいた。

今、何が起こった？

「もう大丈夫、ほら、起きてみな」

「え、ええ・・・ありがとうございます・・・」

「！！」

煙の向こう、うつすらと見える人影から聞こえた愛娘の声に、

「テ、テシユ？」

地主は涙をたたえて一歩、足を前に出す。

「ええ、お母様。そこにいるのね」

「ああ！テシユ！！」

歓喜に震える足と手で、駆けだした。

靄のはれ始めた部屋の中、親子の幸せな一ときに、誰もが目を細めた。

『いいですね、こういうのは…主？』

「そうだな」

ちらりと見上げたイゼの横顔は、どこか遠く、違うものを見ているように見えた。

その表情は憂いているようにも見えて、アゼはその表情を自分の中にしっかりしまった。

第一話 魔術師？ 終（後書き）

とりあえず、一話目終了です。

次は説明を挟みつつ行く予定です。

第二話 クディア？

「な？うまいだろ」

『おいしいです。もう一個ありますか？』

「おお！随分くれたからな、地主さん」

首都、クディアへと向かう列車の中。イゼとアゼは、地主さんがお礼にと持たせてくれた果実のお菓子をほおばっていた。はじめにイゼが町で食べた桃饅頭がアゼは気に入ったようで、二個目を催促していた。アゼが何かを食べたり持ったりすると通常、物体だけが浮いた状態に見えるため座席の下にもぐって食べている。

アゼは『魔神』である。魔のはびこる世界、人間が自力で行けない世界 魔界の神の一人である。とある事情から人間のはびこるこの世界にやってきて、あるきっかけを経てイゼと共にいる。

『契約』

こうだった場合のことを、人は禁忌としてこう名付けた。

十年前

一面、緑色のじゅうたんが敷き詰められたかのような田畑。その合間にぽつぽつと存在する小さな小屋。少年はのどかな国のはずれの村に生まれた。農家がほとんどのこの村で、彼の両親も作物を作っていた。それを毎日手伝い、自分も後を継ぐと思っていた。

少年は昔から魔力が強く、大人でも扱いがむずかしい魔法を簡単に使って見せたりもした。周りはそれを見て怯えたり、崇めたり。でも両親は自然に、いたって普通に育ててくれた。褒めてくれた。両親だけに、“魔”がかすかに見える事も話したが、わが子として愛でて、愛してくれた。

そんな幸せが、永遠だと思っていた。

少年の村が在籍している国と隣の国は、数年にわたる戦争に決着をつけようとしていた。村はちょうどその国とは反対側に位置していたため、殆ど害もなく平穏に暮らしていた。

だが、戦況的に負けを認めざるを得なくなった隣国が、少年の村とその周辺の村に爆弾を投下したのだ。

結果、この国は勝った。

少年は両親を亡くした。友人を、親戚を亡くした。

たった二人、少年と兄だけが生き残った。

生き残った二人は辺りをさまよい、小さな町にたどりついた。戦争が終わったばかりでどこも治安が最悪に悪かった。警察も手をつけられない程に。

そんな中、ちょっとしたことから魔法を使った少年に、街の裏の住人が目を付けた。見目がよかったのもあるだろう。

気が付いたら牢の中だった。兄とともに、見知らぬ人々と共に、薄暗いどことも知れない場所にいた。

後にあれは人身売買の商品置き場だったということを知った。

兄と共に、肩を寄せ合って過ごした。

暫くして、少年だけが買われた。相手は隣国の研究施設だった。魔力が異常に高いことから所望したのだという。

兄弟は引き離された。

研究施設での生活は牢の中よりも悪かった。何より、人として扱ってもらえなかった。自分は商品でも物でも実験台でもない、そう唱え続けて自分を保った。

毎日毎日、苦痛を伴う実験を繰り返し、魔法を使わせられた。そんな毎日がどれだけ続いたか、少年は12歳になっていた。声が聞こえた。

『……え……か……聞こえますか』

「…誰？」

『聞こえるんですね。初めてです、意思が通じた人は。思ったとおりでした』

「・・・」

『わたしが力を貸しましょう。ここを出ませんか？』

「出る？」

『そうです。ただし、成功するとは限りませんが』

これが、少年と魔神の出会いだった。

第二話 クディア？（後書き）

だいぶ暗いです^^；

こんなはずじゃ・・・（汗

もう少し続くかもしれません。

第二話 クディア？（前書き）

何とも暗いのがちょっと続きます^^汗

初めて挿絵投稿というのをしてみました
最後に載ってます

イゼ君とアゼですwww

第二話 クディア？

すつきりとした耳に良く通る心地よい声だった。頭に直接語りかけるような、自分だけに向けられたもの。

「どうということ？」

少年は顔を上げずに聞いた。見張りは外で寝こけている。

『どうもこうも、私は魔神です。あなたと同じようにこの施設に収納され、あなたと同じ目に会っています。魔神について、知っていますか？』

「…魔界の神の一人で、“魔”や“魔物”とはかけ離れた強大な力を持つ。それでいてこつちと自由に行き来できる」

『ほう、よく知っていますね。ですが大事なのはそこではありませんせん』

「？」

少年はわずかに眉をしかめた。顔はまだ上げない。

『私はこの世界では持っている力の100分の1の力も使えません。それでは人間に抵抗するもの難しいのです。そこで、私の器になつてくれる人間を探していました。力を貸すとは、そういうことなのです』

「・・・なにをすればいい？」

『そうですね・・・とりあえず、覚悟さえしてもらえればこちらですませます。いいですか？器になるということは私の力を分け与えることになります。そうなれば普通の人間とはいえなくなるでしょう。苦痛を伴うかもしれません。それでもいいですか？』

声は淡々と事実を並べている。少年はそれに耳を傾けつつ、上の空で聞いていた。冷静すぎる頭で、今の状況と、これから起こるかもしれない苦難を天秤にかける。

答えは決まっていた。

「一生こんなところで生活するくらいなら、悪党にだって悪魔にだってなつてやる」

少年は顔を上げ、立ちあがった。そして、冷たい牢の一角に歩みを向ける。

「そこに、いるんだろ。任せるから、ここから出よう」

『・・・分かりました』

瞬間、辺りが漆黒に染まった。

その事件は、両国の平和条約締結後も公にされることがなくもみ消された。隣国側にとって好ましくない実験内容だったのと、条約締結にその事実が邪魔でしかなかったことが大きく影響しているだろう。

隣国の左に位置する戦争相手だったその国。そこでのちょうど境目に当たる深い森の中で、魔力と魔術、そして魔界に関する研究を行っていた。その内容は人権を侵したものにほかならず、秘密裏に行われていた。隣国の中でもトップの者と、当事者しか存在を知らないという徹底ぶりだ。

そんな研究所で起こったのが実験台の脱走並びにその他の実験台の喪失。とらえられていた少年と魔神が消えていることから、この二人が元とされている。突然の大爆発により殆どの牢が壊れ、実験台の多くが逃げ出しその過程で見つかったものは殺された。運良く生き残った者も国の力によって指名手配などの公的な方法で見つけだされ、消された。

人々の目には森の中から黒い魔力の柱が立ったように見え、神を信じる人々は畏怖を込めてこう呼んだ。

『こくしん たたり
黒神の祟』

結局、見つからなかった者は、少年、魔神、少年の兄、それだけだった。彼らだけが生き残った。しかし、必死に逃げたのだろう兄は、黒こげになった研究所の取り残された少年らの前に姿を現さなかった。

それから数力月。研究所の事件は両国の実力者並びに軍部の知るところとなった。

「あー…着いちまったなあ…」

『何言ってるんです、ちゃっちゃと行きましょう』

「うえー」

ジキナの駅とは比べ物にならない程、人でごった返すその中を、イゼとアゼは歩いていった。土産物屋や飲食店が立ち並ぶ駅の中はちよつとした商店街を思わせる。煉瓦造りの柱を抜けて、外へ出た。そこは、やはり人であふれかえる住宅街であり商店街。細い道や裏道の多々あるこの国の首都、クディア。全体的に都会を彷彿とされる。余すところなく建物の立ち並ぶその街の中で、一際目を引くのが建物の中で一番大きい10階建ての軍本部である。敷地も広大であり、他の建物の3倍は取っている。

軍本部には認められた者以外はいることはできない。なぜなら軍の権限は大きい。誰もが入ることが出来たら、軍の権威や秘密が崩れてしまう。それを理解したうえで国民は軍に絶対の信頼を置くのだ。

「あいつに会うのか」

イゼとアゼは、その見上げるほどの軍本部の目の前に来ていた。

『しゃきつとする。報告だけですし、他のみんなには会いたくないのですか？』

「そりや会いたいけどさ、あいつが報告だけですませてくれるとは思えないし…」

『さ、行きますよ』

イゼは国家の認めた魔術師である。魔術師は軍に属し軍部長官の下につく。権限は軍幹部と同等にあるがデスクワークなどのお役所仕事はない。長官やさらに上の役職からじかに命令が下る。人数が

かなり少数のため必然的に他の魔術師と顔を合わせる事はない。

魔術師は遠くに出る仕事が多い。任務といった方がいいかもしれないが、それについての報告は、全て軍部長官に行うことになっている。

そして、イゼが毛嫌いする相手こそ、軍を総括する軍部長官なのだ。

軍本部の最上階。エレベーターを降りてすぐにある両開きの扉の前にイゼ達はいた。

イゼは、覚悟を決めたように手を上げると、コツコツとノックをしてドアノブを回した。

「…失礼します」

列車の中

> i 2 9 1 3 9 — 3 7 4 3 <

第二話 クディア？（後書き）

次は登場人物が一気に増える予定です

第二話 クディア？（前書き）

ちよいと長いです^^；

今回も挿絵あり

第二話 クディア？

「遅いじゃないか。予定じゃあ昼前にはつくって言ってたよなあ？」

ドアを開けてすぐに聞こえたのは、わずかに面白みを含んだ若い男の声。妙に間延びしたその声からは20代とは思えない程の色っぽさを感じられる。男は本来座る目的の場所ではない、書類が積み重なった机に腰掛けて、イゼを正面ににんまりと口元に笑みを浮かべていた。この男こそが若くして軍部長官へと成り上がった、コバルト・ダムスタン。イゼが忌み嫌う男である。

「遅れは時たまあるものです」

「ま、いいか。任務の報告を聞こう」

コルト（周りの者は略してこう呼ぶ。長官などがつく場合が多い）はぐいと前髪をかき上げて机から飛び降りた。後ろでちよつとだけまとめられている赤みを帯びた茶髪が揺れる。その“美”とつけるにふさわしい顔には妖艶な笑みが張り付いている。

（何もしなきゃいい男なんだろうな…こいつ）

『男が男に思うことですか？悔しいとか思わないんです？』

（・・・ちよつと）

『まあ主も別の意味で美しい顔してますけどねえ』

（女って言いたいんだろ？いいよもう、自覚してっから）

イゼははあとわざとらしくため息をつく、二つの町であったことを淡々と話した。

一通り話し終わった頃、コルトは空中に浮かべてペンにメモをとらせていた紙へと目を向け、その視線をイゼへと移した。鋭く艶やかなその視線にぴくりと肩がはねる。

「おいしい反応だな」

「うっさい！」

「ところで、任務はしっかりとこなしたようだが、おめえらの目的とやらは見つかったのか？」

「っ・・・」

イゼは分かりやすいくらいに目をそらし床をにらみだした。その姿にコルトはため息を一つくと貼り付けていた笑みを崩した。

「ま、ごくろうさん。次の任務までは時間あるだろうし少しゆつくりしてつたらどうだ？お！そうだ。せつかくだし今日予定していた夕食会。おめえもこい」

「はあ？」

「いいだろ？どうせなんも予定ないんだろ？が。みんなも久しぶりだ。顔みてえだろ？よ」

いたずらっぽく笑って無理やりにイゼの肩をつかむ。

「ちよ、また勝手に！」

「それとも俺と二人で遊ぶか？」

コルトはつかんでいた片を引き寄せ、耳元でそう囁く。

「ぎゃー！ぜ、絶対に嫌です！」

イゼはそう叫ぶとコルトのみぞおちに一発くれてやった。

その御一行は夕食会の会場である居酒屋に向かっていった。結局イゼも一緒に行くことになっている。

（まあ、みんなに会えるのは嬉しいんだけど・・・こいつの思い通りになっているようでなんかやだな）

『またそういうことを言う。素直に楽しみだと言って言っちゃいなさい。心の中だけでも』

（う、うるさいなあ）

「ほら、ここだ」

コルトが一軒の家の前で立ち止まるので、それにならって立ち止る。見た目がほとんど民家と変わらないその店は、こげ茶色の壁に三角屋根の付いている古風なものだった。

「あれ、変えた？」

「店か？何か前んとこで爆発起きてさあ「はあ！？」…あれ？知らないのか？連続爆破事件」

「しらねえよ！！捜査は！？」

飄々と言いながら中に入っていく。どうしてそんなに余裕なのか、イゼの頭には疑問と共に怒りが浮かんでいた。

「手詰まり。どうも強力な魔法っぽいんだけど、家一軒ふつとばすくらいだからなあ」

「・・・」

むっとした顔でついてくるイゼをちらりと見て、くすりと笑った。その動作にまたむっとする。

「ま、とりあえずは夕食会。せつかなんだから全部忘れてさ、楽しめよ。ずっと仕事してるわけにもいかねえんだから」

「・・・うん」

まだ浮かない顔で返事をする、同時にコルトが目の前にあつたすだれをバサツと上げた。レジの受け付けは済ませてあつたので、みんなが待つているらしい小部屋に向かつていたのだ。

「あつれー？イゼ君じゃないですかあ？」

「お、嬢ちゃん。帰ってきてたのか」

金髪をツインテールに結び、くりつとした目が特徴の軍一かわいい軍部副長官、テルル・タングステインがダンと机に手について身を乗り出して言った。そのあとに続いて銀髪をオールバックにした自称イケメン、セシム・クリプトン本部第一部隊大佐がさわやかに笑んだ。

「こんにちわ」

イゼはとりあえず挨拶をしておく。

「ちわーっす。コルトこっちな」

体が大きくがっしりしたガナ・ラドル本部第二部隊大佐が自分の隣のあいた座布団を叩きながら言う。

「じゃあイゼ君は隣においで」

「うん」

それに呼応するように自分の隣をポスト叩いて促してくれたのは、軍部一こわい女と微妙な評判の付くスイナル・レイニー本部

第三部隊大佐だ。だが実際はとても優しく気立てのよい女性だとイゼは知っているため、とてととその横に座った。

「おーおー。まだつまみだけか」

コルトも促された先にどっかりと腰をおろし、机の上に並んだ枝豆やらキュウリやらを見回した。まだあまり手もつけられていないようだ。

「待っててあげたんじゃないですかぁー」

テルルがコルトに突っかかるのはいつものこと。

「じゃあ、揃ったことだしなんか食うか」

「じゃあ長官の奢りってことで」

そしてからかうのもいつものこと。慣れてしまえば微笑ましい光景である。

「はっはっはーなぜそうなる」

「おー怖い。上司はおごるもんですよー。ねえ、イゼ君」

そう思っただけで頬をゆるめながら傍観していたところに急に振られ、ふえ！？と素っ頓狂な声を上げた。

「じゃ、じゃあそういうことで」

結局でもってしまった。

「イゼが乗ったぞ！決定だな！」

「おめえらなあ……」

セシムがそう言うのとコルトが不満げな声を上げるが、表情はそうは言っていない。

『楽しそうですね』

アゼがすいっと寄ってきて楽しそうに騒ぎ始めた面々を見ながら言う。もう何度か来ているがまだこのテンションにはついていけない。見ているだけでも十分楽しいのだけれど。

（ああ、楽しいよ）

イゼはその透き通った瞳を細めた。

どこか寂しそうで、でも心底楽しそう。そうアゼは感じ取る。力につながっている分ふたりは共有する部分も多いがさすがに表に出さ

ない感情までは読み取れない。

イゼは全てをアゼに打ち明けてはくれない。もちろんそうする必要がないからなのだろうけど、それが時たま寂しく感じてしまうのだ。

『わたしは、人間に関わりすぎてしまったようです…』

アゼはイゼに聞こえない声で、そうつぶやいた。

> i 2 9 3 4 4 — 3 7 4 3 <

第二話 クディア？（後書き）

次回から新任務です

第二話 クディア？（前書き）

遅くなりました^^；

今回は挿絵はありません。

ちよつと任務の話が出ました。

第二話 クディア？

「うあゝー三味線持ってこーい！」

「お前三味線なんか引けたかぁー！？」

真っ暗な空に、酔っ払ってセシムに肩を貸してもらっているガナが何やらわけのわからないことを叫ぶ。

夕食会の帰り道。当前大人たちはお酒が入っているわけで。ただみんな結構強いらしく、一人弱いガナだけが潰れていた。ちょうど前を歩いていたスイナルが2人をきつと睨む。

「酔ってるな。はしたない」

「弦切ってやる　！！」

「引けないじゃんかつ！！」

そんなこともお構いなしに、ガナは再び意味の分からないことを叫んだ。いちいちつつこんでいるセシムは、疲れからかはあとため息をつく。

「はっはっはっ。おまえらおもしろー」

「コルト！てめえ笑ってないでこいつの処理について考えてくれ！」

「いいんじゃないの。三味線の弦ちぎらせれば」

ケラケラと楽しげに笑って言うコルトは既に傍観者気取りで、前方から後ろ歩きで様子をうかがっている。彼の隣には無邪気な笑顔で笑っているイゼがいる。

「ちよつと！完全にふざけてませんか？ガナなんてただの酔っ払いじゃないのぉ」

イゼとは反対側の隣を歩いていたテルルが、いつものごとくコルトに突っかかりに行く。これもいつものごとく声を無駄に伸ばして。今回はガナも巻き込んでいるが。

「俺は、酔ってない！」

「『酔ってる（わ）（な）』『酔ってる（わ）（な）』」

全員から断言され、ガナは

「うう」

唸るしかなかった。

街灯がぼつぼつと道を照らす十字路で、突然イゼは向きをくると変えた。

「じゃあ、俺こっちに宿取ってるから」

ペコリを頭を下げ、そのまま右手にあった細い路地へと駆け出す。

「お　じゃあなあイゼ」

「気をつけてねえ？」

「暗いからな」

「だいじよ　ぶだつて！じゃー！」

振り向きつつ大きく手を振って、見送りの言葉にこたえる。

「転ぶんじゃねえぞお」

「誰が転ぶか！」

コルトにだけは舌を出して答えてやった。

「あー疲れた」

今日からしばらくは止まることになる小さな旅館の一室。着ていたコートをハンガーに掛けながらイゼがぼそとつぶやいた。

畳が敷かれた、簡素だが風情のある、いい部屋だ。イゼは首都に来た際は毎回ここに宿をとる。

『楽しかったみたいですね。誘われてよかったんじゃないですか？』

そのつぶやきを聞いてかアゼが足元に寄って来る。それを目の端でとらえて、そのまま視線を空に向けた。

「ま　悪くはなかったよな。みんなに会えたし。あいつさえいなきやな」

『またそんなこと言って、強がりになしか聞こえませんかよ』

「なんで強がんなきやなんねえんだよ」

むっとしてアゼを見ると、常に変化を見せない犬顔がにやにやと

からかっているように見えた。多分それは心の奥底でつながっているせい。

「ったく。意味わかんねえ」

そう言うとおもむろにアゼの前にしゃがんで、背中にくくりつけていた荷物を解いた。

通常、人に実態の見えないアゼは物を食べたり持ったりすると、物だけが浮いているポルターガイスト状態になるのでそういう時は人目を避ける。しかしこの背中にくくりつけてある荷物はイゼの魔法により透過されているため、くくりつけていても問題ないのだ。

「…は、お前さらつさらなのな。いつも思うけど」

イゼは黒と白の混ざったアゼの毛を指先で絡ませて梳いていく。それに気持ち良さそうにアゼは目を伏せた。

『主の髪には及びませんよ』

「はあ？俺の髪？」

突然の物言いに素っ頓狂な声を上げる。

『わたしの指じゃちゃんとは梳けないですけど、ほら、絡まらない』

とがった爪の三本指で長いイゼの髪に触れた。確かにあぜの前足では毛もあつて梳きにくい髪の毛を、まったく引つかからせずに通してゆく。梳き終わった金髪は毛先をなびかせた。

『人型になればいいことなんですがね…』

アゼは独白して、イゼの手をぺろりと舐めた。

「くすぐつてえな」

イゼは特に拒否するそぶりもなく、目を細める。二人の間では珍しくない行為だ。

『契約』を交わした“人”と“魔物”。その絶対条件を除いて、二人はとても近い関係にあると言っている。信頼や尊敬、友情、友愛。その他いろいろな感情がその間にはある。もちろん負の感情がないわけではないが。

ところで説明が後回しになっていたが、アゼの言ったように彼は自ら姿を変える事が出来る。初めてであった時は、特に形を持たな

い思念の状態だった。“魔”の見えるイゼだったからこそ認識できたのだ。

実際、なろうと思えば何にでもなれるので、一度人に化けたことがあった。その姿はどこか浮世離れた美しさと艶やかさを伴っていて、横を歩かれるイゼとしては居心地の悪いものでしかなかった。いくら他の人には見えないからといって、否、見えないからこそ、そのまなざしが自分以外に向けられることがないと知っているからこそその居心地の悪さ。妖艶なまなざしにめっぽう弱いのがイゼであつた。

姿を変えるにはそれ相応の魔力が必要になる。消費する魔力の量は変化する生物の能力、質量など数値化した身体能力の総和に比例するため、人間は変化できるものの中でも特に維持が難しい。そう言った魔力経済上のデメリットとイゼが気が散るというメンタル的な理由から、アゼがその姿をすることはなくなつた。

他にもいろいろと動物を試した結果、一番しっくりくるのは大型犬の姿だった。荷物も運べるし、動物本来の能力は付録としてついてくるので、並はずれた嗅覚なんかも役に立った。何より、イゼの傍らにいてもまったく不自然な気がしない。これはもちろん第三者の感想ではなく、本人達の物。イゼも接しやすいと感じたし、アゼも行動しやすいという利点からだ。

「シャワーでも浴びっかな」

イゼがそう言つて、立ちあがつたときだった。

バガン、と大きな音を立てて部屋のふすまが開く。

「!？」

イゼが見開いた目を向ける先、戸口には血相を変えた女将がいた。「逃げて下さい！」

ガナをセシムと共に家に送り届けたコルトは、人通りのない夜中の道をぽつぽつと歩いていた。転移の魔法は許可がない限り使えない。軍のトップでも仕事をしていない間は一般市民と同じ扱いだ。

一年を通して、たいして気温の変わらないこの国の夜風は冷たい。楽しい宴会の余韻に浸った頭を冷やすには、十分だった。

コルトはふと、イゼの顔を思い出し、苦笑する。あんな子が何百もの魔法を網羅し、加えて魔術をも操る『魔術師』だと、だれが思うだろうか。そこまで考えて、眉間にしわが寄る。そんな彼に振り分けられた任務を思い出したためだ。

その内容は最近話題になっている連続爆破事件の捜査及び解決の補助。これにはスイナルも一緒に担当することになっている。警察だけで捜査していたが、どうも魔法や魔術に関わる方法の様なので軍に捜査権が回って来たといういきさつだ。

基本的にこの国で起こる事件は大きく二つに分けられる。魔法の類を使ったものとそうではないものだ。前者は軍が担当する。この国では魔法に特化したものがつく職業は軍がほとんどだ。もちろん身体能力も高めるが、それは訓練に励めばいいだけのことだ。それにより、警察は必然的に身体能力が主の組織となるのだ。

攻撃的な魔法も軍や国家の管理下の元制限されている。特定の者にしか配布されないそれらを、一般の市民が扱うことはほとんどない。軍や警察のほんの一部、そして魔術師。それが強力かつ攻撃的な魔法（魔術）を所持できる役職だ。しかし、まれにそれが流出することがある。扱えない場合が多いのだが。OBについてもしっかりと管理しているつもりでも、どこにでも穴はあいている物で。軍の仕事は一向に減らないのだ。

（知らなかった見てえだしな…この事件。明日呼びだすかなあ）

コルトは楽しそうに笑った。

第二話 クディア？（後書き）

アゼの人型は黒髪の長髪です。

次はやつと魔法らしい魔法が出てくる予定・・・です。
あくまでも、予定です。

第二話 クディア？ 終（前書き）

最後にアゼ君の人型の絵を載せました。

第二話 クディア？ 終

「ば、爆弾!？」

イゼはおかみの話を（といっても一言ほどだが）を聞いて驚愕した。

「はい!! 下の階の、ちょうどこの部屋の真下にあたります! 早く逃げて下さいっ!」

それだけ叫ぶと、女将はドアを放ったまま、右へと消えた。他の客の部屋へ行ったのだらう。

『主、魔力を感じます。∴真下ではありません』

スイッと寄って来たアゼに、

「ああ」

イゼは短く肯定する。

「とりあえず、爆弾、何とかしねえと」

言うや否や駆けだした。すぐ左手にある階段を駆け足で降り、真下だという客室に入る。小さな宿屋のため、距離はないに等しい。

襖を開けると、中に黒いメカニカルなものが置いてあった。もちろん周りに人はいない。女将があらかた追い出したはずだ。

そのメカニカルなものに近寄り、上からのぞく。赤や青のコードがちらほらと顔をのぞかせ、真ん中ではデジタル画面が刻々と時間を刻んでいた。残りの時間は03:25。一応言うが単位は分だ。

「1分。十分だ」

イゼはそういうとおもむろに両手を突き出した。平を上に向けて。と、手と手の間の空間が歪み、空間にボール型の一ゆがみ……を作り出した。

「りゃっ!」

掛け声とともにその一ゆがみ……を思いつき爆弾に打ち付ける。ぐにやりとボールが歪む。うねうねと渦巻くそのなかに、のめりこむように爆弾が収まった。

「とりあえずこれでしばらく爆発はしねえな」

『時間を止めた空間に閉じ込めたんですか？破壊すればいいものを』

「壊して爆発する仕組みだったらどうすんだよ。まあ、こつちが本命ってわけじゃねえだろうけど。魔力、つかめそうか？」

『ええ、もうだいたいの場所は分かってます』

「さすが」

3：20で時間を刻むのをやめた爆弾を放置して、イゼはアゼを先導に飛び出した。

臭いを嗅ぎながら進むアゼに従って、辺りを見回しながらイゼは歩いた。

宿の淵に沿うように描かれた魔方陣。微量な魔力はここからだ。普通の者には見えないそれは赤色で地面に記されていた。

（これは引火と破裂の複合式。連続爆破事件と関係があるかもしれない）

そして、少し大きめの魔力。彼らが追うのはこれだ。彼らが思うに、この式の起動や制御をどこかで手だれの魔法使いが行っているはずだ。式には時間捜査や起動に関する図式が一切なかった。遠距離で操作する場合、必ずと言っていいほど組み込むものがないのだ。それ以外の遠距離型魔方陣は意識を繋げてリアルタイムで制御するしかない。

そうになると、だれにも邪魔されずに集中できるような場所が必要になる。ただし、意識を繋げるにもあんまり遠くては不可能だ。つまり、犯人は近辺にいる。そう推測することは彼らほどの魔法知識を持った者なら容易だった。

数分後、現場にわずかに残った魔法粒子と人間の匂いから、アゼはその場所を特定した。

いたって普通な、否、随分とぼろいアパートだ。お世辞にも大きいとはいえないその二階の左端の一室から、細くつながった魔力を感じるという。イゼには感覚としてしか分からないがアゼにはしつ

かりと見えているようだ。そこは人と魔神の違い。首都では一般的なこげ茶と黒の煉瓦造りの家。箱形のその家からは一切の明かりが見られない。魔動車があるので、いないはずはない。そうすると寝ているのかとなるのが普通。通だが、もちろん、イゼはアゼの言葉を信じる。

（宿はまだ無事だな）

イゼは自分の小指に巻かれた白い糸を見て確認する。宿の周りにあった魔方阵は爆発の根底にあるものだと思われ、あれが起動しない限り宿は無事だ。わずかに揺らめく魔力からして、遠隔操作で少しづつ魔力を送り込んでいるようだ。それには時間がかかるため、時間稼ぎにあの爆弾を使ったのだろう。彼の小指に巻かれた糸は、魔方阵へとつながっている。これもまた魔力で出来た特殊な糸で、地面に描かれた魔方阵の内部に忍び込み、詳しい構造や魔力の量などを実行者と同じように知ることが出来る。並はずれた実力の持ち主でなければできない神業だ。

『入りますよ』

「ああ」

促したアゼに従って、イゼは錆びついた階段を音を立てずに上った。表札も何もない、郵便受けには郵便物がたまっている。空き部屋だろうか。

（ここだ）

つづけば崩れそうなドアを睨みながら、つぶやいた。アゼはそれに、イゼと同じ方向を見据えることにより無言の肯定を示す。そう断言するのも無理はない。魔法に強く精通するものならば誰もが感じ得る、魔力が駄々漏れである。よく今まで通報されなかったものだ。あまりに高い魔力の放出は、一般人に与えられている魔法には不要なもの。そうなると必然的に違法入手した魔法の可能性が高いのだ。しかし、実際のところそういった事例は少なくない。見つかっていないだけでたくさんあるのだろう。

（まあ、こういうことさえしなきゃいいんだけど）

余計なことばかりを考える頭をシャットダウンし、銀色のドアノブへと手をかけた。すつと意識を集中させる。

二人。

（せーのっ）

ばがっ

「!？」

勢いよく扉を開いた刹那、右側から殺気を感じて軽く左手前にそれた。一瞬先までイゼのいた空間を、あやしく光る切っ先が通過する。

「…誰だ」

真つ暗な部屋では顔はよく確認できないが、わずかに漏れ入る月明かりが体にあたり、胸のふくらみを浮きだしていた。サーベルをかまえた女は何も言わずに、振りおらしたそれを構えなおす。

反動的にイゼも、異次元の扉を開き小型のナイフを差し向ける。唐突に表れた刃物に、女は息を一つはいた。感嘆しているようだ。確かにこんな芸当は魔術師くらいしかできない。今はそんなことはどうでもいいのだが。

（アゼ！）

『分かっています』

女は一気に距離を詰めた。嵐の様に加えてくる洗練された剣筋をイゼはナイフ一本で巧みに防ぐ。じりじりと後退するイゼの傍ら、跳ねるように飛び出したアゼは、奥にいるであろうもう一人のところにへ向かった。半開きのドアを突進で放つ。眼前には驚いた顔でこちらを向く若い男の姿があった。アゼならば暗くても夜目は効く。まだ二十代程度にしか見えない男性は、きよろきよろとあたりを見回し、途端にハッとして舌うちした。

この男が繊細な作業をしていたのだろう。一瞬の気を途切れでも命取りになるような、細かい作業を。アゼの姿が見えていない彼にはなぜ扉が開いたのか理解できないでいるはずだ。そんな状況では驚いて気をそらすのも無理はない。魔力の供給は完全に止まってしま

っている。

アゼは体に魔力をため、それを固めて空中へと出現させた。簡素な檻の形をしたものだ。

「へ？」

ドシヤアアア

「な、へ？お、おり！？」

男は意味が分からないといった様子で素っ頓狂な声を上げる。

一方、その声を聞いた女は、すっと剣を引いた。

訝しんで自らも剣を止めたイゼの目の前で腰にサーベルを納めた女は、消えた。

「！」

（しまった）

転移魔法だ。

一般市民は知らない高度魔法の一つである。行く先の標準を決定し、そこへ自信の体を転移させる。細かい空間操作を必要とするため、高度な魔法とされている。

「タダものじゃない、か……」

『主、こちらは捕まえました』

「ああ、了解」

ちらりと扉の奥をうかがい、魔方陣が効力を失ったことを確認して、

「あいつに連絡しなきゃな……」

イゼは空を見つめてつぶやいた。

第三話 魔法陣？

「俺が任務の通達する前に出くわすとは、運か？」

「そうならあんまり嬉しくないですね」

「だが、顔を見たというなら大きな手がかりだ。しかも実行犯を一名捕獲することが出来た。なぜここが狙われたのかが分からないが」

あの後コルトへと連絡を入れたイゼは、連続爆破事件の捜査が自分の任務としてあてがわれていることを知り、状況報告のため、担当していたスイナルと連絡を受けたコルトが駆けつけていた。スイナル率いる第三部隊の隊員数名も一緒だ。彼らは現場の検証や聞き込みなどと言った警察じみたことにいそしんでいる。

「ああ、ここが狙われた理由か：多分イゼがいたからじゃねえか？」

スイナルの独白に、コルトはわずかに表情を歪めて言った。

「へ？」

俺？とイゼはいぶかしげに聞く。それにコルトは無言でうなずいた。

「なんで・・・？」

「たぶん、俺らと一緒に行動したからだろうよ。その辺考えて行動するんだったなあ」

「：相手の狙いって、長官なのか？」

「私が説明します」

説明役を買って出てくれたスイナルによると、今回のこれは五件目。一件目は軍本部の隊員がよくたまっている町のバ。軍OBが経営している。二件目はコルトのよく行く食事処。家と軍本部のちょうど中間にあつてよく利用していたらしい。三件目は前までみんなで行っていた居酒屋。ここはイゼも行ったことがある。ここ数年間みんなで夕食会をするときには使っていた。四件目は軍がいろいろな目的で使うホテルだ。主に接客や会食に使う。

全て軍、主にコルトの行動範囲を中心に狙われている。コルトの周りにいるスイナル達もまたしかりだ。

だが、なぜか誰も怪我をしないような方法で仕掛けてくる。

今回もそうだったように、初めに実態のある爆弾を置き、住民に危機感を植え付け、避難させる。もちろんこの爆弾はただのフェイク。そうして無人になった建物を、魔術に精通した者にしか見えない魔法陣（事前に描いてあったと見られる）で爆破。被害は建物のみになる。

なぜこんな手の込んだまねをするのか、なぜコルトたちを狙うのか。それらはいまだ謎のままだ。だが、今回イゼ達が爆弾魔の犯人一味とみられる男を確保したため、その辺は進展が見込まれる。素直に話すとは思えないが。

「ふーん。変な事件だな」

「だから手間取っている」

「あの男は話すと思うか？」

コルトが意味ありげに問う。

「まだなんとも。一応カレンをつけたが」

「カレン中佐をつけたんですか……」

「そりゃ、まあ、大丈夫だろう」

カレン中佐はスイナルの直属の部下である美麗な女性だ。ただ、乱暴でドSな性格のため、軍の中では結構恐れられている。スイナルと並んで軍部最強女士である。

そのため、二人が同情の念を抱くのも無理はない。

『主、ちよつと』

アゼはそいうと現場検証の行われているアパートの中へと入って行った。

「俺もう一回見てきます」

（待てよっ）

不自然にならないように断って、テープをくぐる。アゼは男のいた部屋の前で待っていた。

そしていまだに残っている魔法陣を踏みつけて言う。

『見覚え、ありませんか？』

「へ？」

（魔法陣にか？）

アゼは深くうなづく。

不信に思いつつ、イゼは記憶を探りながらその魔法陣を隅々まで探る。形、文字、紋様、一つ一つ確認して

「っ！？」

気づいた。

（なんで、なんで今更こんなもの・・・）

陣の隅の四方に塗りつぶされた鮫を現す魚型。そしてこの文様の型、文字の書き方。全てが一点へと凝縮する。

『研究所で使われていたものと、同じです』

「あ・・・」

『主？』

フラッシュバックする記憶　鎖。下卑た笑顔。恐怖。苦痛。監

獄。

忘れたと、忘れる事が出来たと思っていたもの。

（だめだ、この場所にいたら）

『主！』

駆けだしていた。

「イゼ！？」

コルトの制止も構わず押し切って、ただただ一人になれる場所を求めて。

こぼこぼとティーカップに液体が注がれる。白い朝日を反射して淡く朱を映す波紋に、女性はわずかに口元を緩める。

薄暗い部屋の中で共に夜明けを迎えるのは二人の男。

「あの男には記憶操作をしておいたわ。私達のことを知れることはない。安心して？」

「そんなことは百も承知だ。貴様がぬかるなどあり得んからな。それよりも、昨夜標的として少年だ」

宿のメイキングされたままのベッドに腰をおろした男が、自分の分のカップに口をつけながら言った。限りなくバスに近いテノールのしやがれ声で、重く紡ぐ。

「…魔物を連れていた」

「魔術師の様ですよ。登録番号6番、イゼ。セカンドネームはありませんね。空欄ばかりじゃない。最年少で称号を手に入れたという噂の少年ですね」

女性が手元の資料を読み上げる。

「魔術師は魔物と契約することはできない。まあ、例外もいるが。禁則事項になっているはずだ」

「もう一度、写真を見せてもらえますか？」

窓側に立っていたもう一人の男が女性の元へ歩み寄る。返答も待たずに机上にあった写真に手を伸ばす。

そして、くすりと笑った。

「どうかした？」

「もしかすると、わたしたちの存在に気づくかもしれませんよ。彼は」

「なっ!？」

「…何を根拠に？」

自らを睨む鋭い目つきに、男は自嘲気味に笑う。

「あの魔物、いえ、魔神と契約したこの少年を、覚えていませんか？まあ、もう十年も前ですが」

「まさか!？」

腰を落ち着けていた男はいきなり立ち上がると、ずかずかとやってきて写真を手から奪った。

そして、口角を釣り上げる。目にはあやしく、光がもっていた。「…間違いない。例の少年だ。はははっ、こんなところで会えるとはなあ!」

狂ったように笑い出した男を尻目に、もう一人の男は元の窓際へと歩を向けた。

やっとあたりを照らし始めたオレンジ色の光に目を向けて、
「イザナ…」

優しい笑みを乗せてつぶやいた。

第三話 魔法陣？（後書き）

遅くなりました。

どうにも最近スランプです・・・

誰か私に発想力を！

活動報告、初めて見ました。

第三話 魔法陣？（前書き）

ホントにお久しぶりです。

第三話 魔法陣？

オレンジに町が染まっていく中、イゼは一人、薄暗い路地の一角で夜明けを迎えた。自らの体は決して光に触れぬよう、誰にも気づかれぬよう、息をひそめて。

（もし、もしもあの神を描いた人物を見つけ出したら、兄貴を探す手掛かりになるんだろうか？）

寄りかかるレンガは冷たく、段差が背中を刺激する。

（それとも・・・）

両膝を抱える手に力を込める。

（また…あのときみたいに…）

思い出されるのは凄惨な生き地獄。否、生きた心地などしなかった。

とっさに頭を振って追い出す。もう過去だ。十年も前だ。今はあのころと違って力だつてつけた。

（大丈夫。もうあの建物は無い。もうあんな研究は許されない。俺がいなくなっても…気づいてくれる人がいる）

『主。わたしはいつでも主のそばにいます』

いつの間にかそばに寄り添っていたアゼに、顔を上げて笑いかける。

彼は同じ時を共有した。自分の痛みだつて分かってくれている。そして一緒に乗り越えようとしてくれる。

契約しているからだけではない。十年を共にした友情を超えた感情がそう告げる。

「追っ」

『いいんですか？』

「大丈夫…とはいえないかもしれないけど、…一人じゃ、ないだろう？」

そう言ってアゼのふかふかの毛並みに触れた。自分しか触れる事の出来ない、灰色の交じった黒の毛に。

『・・・そういうところ、イゼはずるいですよね』

「あ、名前呼び」

『宿に帰りますよ。主』

「戻っちゃったあー」

（きっと、二人だから前に進める）

アゼに読み取れない意思の深いところで、『ありがとう』。

同時刻。

コルトとスィナルはそろって事態の急展開に目を回していた。

スィナルが言った通り、カレンに取り調べをされた男があっさりはいたのだ。カレンの言うには、たいして脅していないすぐに吐いちやってつまらない、そうだが、軍としては一刻でも早く犯人を逮捕できるのならそれに越したことはない。ただ、こんなにあっさり言うてしまうとは思っていなかっただけだ。

男の証言に基づいて突入したぼろアパートには、これまた証言通り他の男が二名いた。その2人を連行して事情聴取し、新たに上がった物件で証拠の爆薬や、陣のコピーを押収している。それらについての報告書や、一人一人の書類送検で軍内部はわたわたと忙しく回転していた。

「まさかこうなるとは・・・イゼの手柄じゃないか。ってか、この陣のコピーどこから？」

「彼らも分からないの一点張りです。どうやら、記憶操作をされた痕跡があります。わざわざ痕跡を残すとなると、宣戦布告か、はたまた抑制か」

「どっちにしろ裏があるんじゃないか。めんどつくせーなあ」

コルトはいらいらと垂らした前髪を書き上げた。けだるそうに白んだ空を見上げる。

「…追わないでくださいね？」

「そんな野暮なまねはしたくねえよ。……できればな」

高い、秋の夜明けの空を見ながら、一人の少年を頭の隅に浮かべる。

最後につぶやいてしまったのは、走り出して行った彼のせいか。

なぜ、こうにも自分を乱すのか。綺麗事など、何度も捨ててきた。理想じゃ軍は動かせない。

それなのに、一人の少年の小さな背中を見ただけで、危ない橋でも渡ってしまいそうになる。

彼がそこへ入り込むのなら、止められないのなら、きっと自分も入ってしまうだろうと思った。

「・・・なんてな」

自嘲気味に笑ったコルトに、スイナルは嘆息して、彼女にしては珍しい柔らかい笑みを見せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459v/>

少年魔術師 - A spell Illness -

2011年10月7日03時16分発行